關西大學新報

発行所
関西大学新報社
大阪市大淀区長柄中通2
電話（358）2 2 7 1
発行人　木下 和博
編集人　木下 和博
（一部　10円）

入試二月一日より実施

一部と同日、とまどう受験生

二部競争率は約二倍位か

昭和四十五年度入試が二月一日（日）から六日（金）までの六日間に渡って実施される。本年度は一部、二部とも同時に実施される。これは、入試紛争闘争の懸念があるので、警備を集中するためと思われる。

二部入試の期日が例年より約二十日程度早くなったため、職場であるいは自宅で、入試にそなえていた受験生は、だいぶまどっている。昨年は経済学部で入試課目に数学を入れるなど、二部受験生に対する、不利な条件が重ねられて来ている。

入試期日を、二部、一部同時にしたことは、二部の落ち穂拾い化対策とならないこともないが、しかし、入試期日を早くした事で、逆に勉学を進める恐れもある。結果に注目したい。なお試験場、各学部試験期日、一月十九日現在の願書提出数は次のとおり。

【試験場】

二部　天六学舎
一部　千里山学舎

【期日】（一・二部同日）

商学部	二月一日（日）
法学部	〃二日（月）
社会学部	〃四日（水）
文学部	〃五日（木）
経済学部	〃六日（金）
工学部（一部）	〃三日（火）

【地方試験】

金学部（一・二部）二月一日（日）

【地方試験場】

金沢・名古屋・高松・広島・福岡・鹿児島

【募集定員及び願書提出数】（一月十九日現在、締切りは一月二八日）

学部	定員	願書提出数
二部		
法	約三〇〇	三〇〇
文	一五〇	一五六
経	三〇〇	三四〇
商	一五〇	一五二
社	一〇〇	七四
一部		
法	約五〇〇	三一三一
文	四〇〇	二三三三
経	五〇〇	一六〇九
商	五〇〇	三一六五
社	四〇〇	三八五七
工	一〇〇〇	二六二五

受験生Tさんの話し

私は高校を卒業したのは去年です。一年間入学金を貯金しながら働いていましたが、今年一月から、入試になると仕事をやめました。入試は三月だと思っていたのですが。

入試の期日が早くなったことは、何か前からわかっていたのかも知れませんけど、働いていたらそれがわからないし、それに大学の事情もあまり知らなかったものですから。

今年は猛勉強ですが、たった二月のまとめぐらいでは、現役の人にはかなわないでしょう。今年だめだったら来年は受験できるかどうかわかりません。せっかく会社までやめたのだからできるだけ頑張ってみます。

社員募集

受験生諸君！

安保決戦の70年に入学される諸君、ここ数年に渡る国家権力との激しい闘いを経験して来た同志が、諸君を待っている。

激動する社会状勢下、我々新報社では、主体的に、新聞製作、理論活動に参加する意欲ある諸君の来社を地下BOXで待っている。

関西大学　新報社

巨大・大企業に伸び良好

足りない積極的運動〈就職課〉

～44年度 就職状況～

昭和四十四年度卒業者の就職がほぼ決定した。就職課の話によると、例年並みの率になっている。一部に比べると就職率は低いが、未決定者は、現職けい続か、個人的に就職あるいは勉強している部分。卒業者の中で大学を通して就職を希望する者が約25%程度、しかし他の者でも転職する者は多いが、各人の就職運動の欠落がこの数字に出ているという。就職課では、各人がもっと積極的に働きかけるよう望んでいる。

学部	卒業者数	就職希望者数	決定者数（内定）	就職率（%）	巨大企業	大企業	中企業	小企業	官公庁・その他企業以外
二部									
法	303（ 4）	62（ 0）	45（ 0）	72.6	7（ 0）	14（ 0）	9（ 0）	0	15（ 0）
経	241（ 2）	91（ 0）	80（ 0）	87.9	8（ 0）	20（ 0）	26（ 0）	2（0）	24（ 0）
文	151（35）	28（ 3）	19（ 3）	67.9	0	6（ 1）	4（ 0）	1（0）	8（ 2）
商	175（ 1）	40（ 0）	35（ 0）	87.5	7（ 0）	11（ 0）	9（ 0）	2（0）	6（ 0）
計	870（42）	221（ 3）	179（ 3）	81.0	22（ 0）	51（ 1）	48（ 0）	5（0）	53（ 2）
一部									
法	785（26）	652（23）	611（14）	93.7	167（ 1）	168（ 0）	80（ 4）	4（0）	192（ 9）
経	691（ 5）	584（ 0）	548（ 0）	93.8	173（ 0）	224（ 0）	77（ 0）	10（0）	64（ 0）
文	808（216）	537（120）	427（71）	79.5	41（11）	125（14）	110（11）	16（3）	135（32）
商	631（ 5）	529（ 2）	500（ 2）	94.5	141（ 1）	183（ 0）	92（ 0）	11（0）	73（ 1）
工	1096（ 0）	1077（ 0）	1024（ 0）	95.1	228（ 0）	383（ 0）	238（ 0）	15（0）	160（ 0）
計	4011（252）	3379（145）	3110（87）	92.0	750（13）	1083（14）	597（15）	56（3）	624（42）

（昭和44年12月31日現在（　）内は女子）

乱気流

▼70年代は、まさにわれわれにとって資本の論理が貫徹されている〝大学〟という名の機関の下により一そうの資本の下への隷属化そしてさらに、われわれの人間的盛性的諸欲求―自己を無限的に発展させようとする欲求に対する社会的制約の拡大時である。それはわれわれ勤労学生にとって自らの存在が何であるのかを明確に自己展開することを要請している。職場にあっては、労働者としての我々が、これまでに自己の社会的生活条件としてきたところの資本主義的生産様式の、帝国主義的確立の中で形成されてきた近代化路線の延長上にある労務管理者々々がまさに資本制生産様式の発展という、つまりは資本そのものの労働というものに対する関係＝支配の強化そのものでありそれは、まさにわれわれ労働者に対する桎梏の何ものでもない。この資本側生産様式の発展を文字どおり自己の桎梏として感受し、自己の発展のためにいかに闘うかを明かにすることを、早急なる課題としている。

職場での資本のわれわれに対する支配、さらにその強化が二部大学という場にあっても、一環して桎梏として迫ってきている。職場にあっては、労働力商品としての自己が、大学の中にあってはより高価な労働力商品としての自己を切り売りせんがために、教育サービスを買い、それを消費していくという不可避的なる学生生活をおくらねばならないという学園内における矛盾。資本制生産が発展するためには、われわれに対する支配と掠取の強化へと進まざるを得ず「専門化、部分化、白痴化」という文字で表わされる高級なる商品としての労働者であるとともにわれわれの存在が、社会的権力と自己との矛盾関係の闘争として提起されていかねばならない。それはまた68・69年の日大、東大を頂点とする学園闘争において学園内の資本の下における矛盾の暴露として社会総体の問題として提起されてきた質のものである。

学生春秋

▼東大闘争安田決戦から一周年、佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争から二周年目の米軍基地包囲スト闘争に突入した。商業新聞が伝えるところによると、十九日午前中までに、六人が逮捕され、米兵の乗る車に突っ込まれたピケ隊の五人が負傷、他にも、米住宅からの流弾によって婦人が重傷を負うなどきわめて険悪な状況になっているという。

昨年秋の「安保決戦」以来「独り闘う沖縄」をイメージさせているが、これで70年代、すくなくとも70年安保闘争の第一歩が構築され始めたといえよう。「敵は米軍当局と、日米協調路線を強化した本土政府である」。

世界は、正に政治＝軍事の時代に突入しているといえる。

〝とはいっても、関大共闘に〝軍事〟的に紛砕された、右翼中執、体育会は居直り、居すわりを続けている。昨年おそく発行された「紫紺」は「いくらか、混乱した時はあったが…」と居直り宣言。大学当局も、広瀬学長自身「私は大学立法に賛成である」と意識的に（？）もらす。70年代は〝居直りの時代〟、とは右翼のための言葉である。きわめて〝政治的〟なコトバ。ホンワカムードの「昭和元禄」から、強烈な開き直りの時代へ。日本的なアルミドール。クールな東西ラインは加熱、ホットラインへ。70年代という熱湯は、冷やかな居直りを許すまじ。

69年代の「反戦・平和」、あるいはプロレタリアートの階級の自立という闘いの質をもって、社会的制約を乗り越え、それを突破するものとして、資本主義体制の矛盾の根底に迫る闘いとして展開されて来た闘争に対し、反革命的に非暴力というキャンペーンをもってして、あるいは全共闘は学園闘争において何ら学園内の質を改良し得ずに終わったというギマンの改良に陥いる部分（明らかに日共＝民青）の反革命性、さらに市民社会のブルジョア秩序を守れという上からの恫喝をもって組織された自警団の登場、下からのファシズム運動をもってしての現体制の矛盾の資本と国家の下への包摂。これらの文字どおりの反革命的弾圧に対して自らのプロレタリア階級の人間として、明確なる自己展開と自己発展を欲っするが故の断固たる抑圧に対する不断の抵抗として闘うことが要請されている。つまりは、帝国主義的再編成そのものの路線を突進しつつある体制が自己にとってはすでに、桎梏であることとして闘い、階級として敵対することとその抑圧に対して自らをプロレタリアとして階級形成していくことを余儀なくしていくものである。

現体制からの矛盾を明確に自己の桎梏として把え、それを媒介として自己を階級形成へ向かわしめねばならない。

古書籍全般売買
天牛本店
淡路駅 堺中医前
電話(321)三五八一九番

WINE & TAE
関大天六学舎前に
憩の場
SNACK 喫茶
きガール
TEL 351－9166

気軽なあなたの
金融機関
質「むかでや」
天六バス操車場横　TEL(351)9527

関大闘争その敗北的視点

総括にかえて②

関大闘争の経緯

以上のことを踏まえながら、関大闘争の総括を試みたい。

関大闘争は、一般には〝日大闘争型〟といわれる。当初は対右翼中教解散という、学友会闘争として出発しながら、結局、中教審粉砕―大学立法闘争をからませながら、それが、大学の右翼、ファッショ体制打倒の闘いとして大衆的武装闘争を展開したからであり、しかしながら一口に〝日大闘争型〟といっても、その時期からみるならば、街頭政治闘争が、まさしく「プロ独かファシズムか」「革命か反革命か」として、スローガンを登りつめていく時であり、日共同を中心にしながら、右翼学生の組織化が進み、勝共連合等が大きく動き出し、さらには、政府ブルジョアジー自ら、議会制民主主義をかなぐりすて、反革命を露骨にしてきた時であって、いわゆる第三期全共闘運動として闘われる闘いであったのだ。

先ず関大闘争は大きく①1昨年の学友会闘争、社会学部闘争を経て、昨年6・15全学共闘会議結成まで、②6・22関大会館バリケード封鎖から、9月封鎖解除まで、③封鎖解除から秋の決戦を経て今日まで、の三期に分けることができるだろう。

すなわち第一期は、暴力的独裁者、右翼中教の、テロ、リンチの中で、大衆の意志を統一し、中教審、大学立法の危機意識を、関大右翼ファッショ体制打倒のスローガンへ高め、闘いを準備した期間であり、第二期は、第一期における学友会闘争、社会学部闘争の地平を、全共闘武装部隊の形成によって新たな局面へと切り開き、右翼武装集団を粉砕しつつ関大機構へ切り込んだ時期であり、封鎖、街頭闘争によって、対国家権力へと武装を高めた。そして、大学立法、予防反革命の攻勢で、全国学闘バリケードが軒なみに解除されて行った第三期は、昨秋安保決戦を闘い、敗北から、再び学友会機構へヘゲモニー獲得へ、文化運動の総仕上げへ転回していく。

関大闘争が、それまでの全国的学闘闘争の質を獲得していくのは6・15闘争を契機とした関大全共闘結成の頃頃からである。それまでの学友会闘争、社会学部闘争は、中心的には、セクトによって担われ、そうであったが故に、右翼体育会に応援団を中心とした暴力の前に闘いを未成熟のまま終わらせようとしていた。しかし第二期に入ると、中教審、大学立法の政治的攻勢と、個別関大における、右翼ファッショ体制を相互にからませ帝国主義の政治的矛盾を関大の体質の中に凝縮する事によって、危機意識を大衆的武装へ高め得たと言える。すなわちこの事は、階級状況が武装闘争の時代に突入した事を示すだけでなく、大衆武装の根拠が、まさし、帝国主義の暴力、抑圧、反革命にある事を示していると言える。会館封鎖直後の対右翼とのゲバルト勝利によって、言い換えれば学内暴力装置粉砕によって、闘争の新たな政治状況を切り開き得た。その事を抜きにしては、学友会機構の改編は語られ得ないし、対当局対国家権力への闘いは構築され得ないことが明確になっていた。そして7月夏休みまえの第一回機動隊導入の時、全学集会には、二千余のシンパ層をデモ隊列に組み込むまでになる。しかし、この時「学友会機構の再編」は、〝関大機構の打倒〟へと戦略スローガンを拡大深化させたのであり、焦点は、〝ソヴィエト型全学評議会〟として、全共闘武装部隊を大衆化、合法化する事にあったといえる。しかしながらこれは、先述したように、大学という、〝権力からの空白地帯〟に容易に言える事であって、具体的には、なし崩しファシズムに抗する下からの権力再編策③闘争主体の生活条件、が障害として立ちはだかったことの三点に収約できるだろう。

天六闘争は、千里山に於ける会館封鎖を突破しながら、中心的職場、地区における反戦派労働者も、学闘闘争において登場しえず、プロレタリア的自己否定と、ブチブル、インテリイとしての自己否定が、相互に分離したまま、一体となった闘争の局面を作り出しえないまま終局していった。

闘争の過程で、日共―民青の動揺、分解を引きおこし、社民的発想部分が収束し、体育会内部の亀裂を促進させつつも、決定的には運動組織体としての全共闘形成が武装中核部隊の未成熟、力量不足で不可能であり、自然発生性を高次化させることは出来なかった。

I、II部の分断支配、千里山学舎封鎖後天六において大学事務が続行されたことなどからI、II部総体としての全共闘構想が出されたが、武装部隊を明確に有しえない二闘委は、逆に千里山部隊に突出した部分を吸収される事になった。

天六での闘いでさらに注目されるべき事は、中教審、大学立法粉砕闘争が、名目的にしろ、学友会執行部「全学連」支持会議、全共闘二闘委が取組んだにもかかわらず、大衆運動として徹底化しなかったことである。それぞれの部分から資料、ビラが出され、臨時学生大会まで開いたにもかかわらず闘いは、学生大会に結集した一千名近い大衆をよそに、セクトの中に空転していたことである。闘いは低い次元での自然発生性の中に終結したといえるだろう。

天六における闘いは、少なくとも、再度の構築によって、ポッダム目治会に収約される学内矛盾を暴露するだろうし、擬制的な「勤労者大学」を「コンミューン的プロレタリアートの集結点」へと止揚させる意識性を獲得する方向に向かうことを要請されるだろう。

沖縄全軍労の長期ストは、70年代、日帝の東南アジア、とりわけ朝鮮戦争遂行の危機を語り、安保斗争から、沖縄斗争をへて、斗いは「戦争」を軸に形成されることを示した。全人民的斗い、ゼネスト体制、武装根拠地ソビエトが早急に要請されているといえよう。

天六闘争の敗北

天六における闘いはどうか。

右翼―学友会権力があまりにも強すぎる天六における闘いは、千里山と歩調を合わす事は不可能であった。スローガンは同一でも内容的には、新左翼の質と量の獲得が中心であり、闘争主体の形成に重点はあったといえる。

一時期は百名を越える結集を持ちながらもそれが戦力として定着化しえなかったのは①中核部隊の闘争の未経験②当局のI部II部分断支配構造の貫徹と、未成熟な天六闘争に対する千里山同等の援護策③闘争主体の生活条件、が障害として立ちはだかったことの三点に収約できるだろう。

天六闘争は、千里山に於ける会館封鎖を突破しながら、中心的職場、地区における反戦派労働者、学生の斗いを一重に組織することが可能であった。

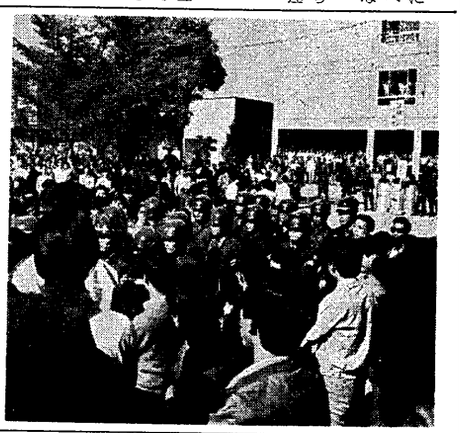
全共斗連動が確立した「自己否定」の論理が、プロレタリアートの階級形成、階級消滅への義理へ止揚されるということであり、プチブル、インテリーとしての自己否定と、プロレタリアートとしての自己否定が二重に問われる場であったといえよう。

しかしながら、現代ブルジョアジーの支配構造はいわゆる〝擬制の民主主義〟であり、おくゆかしくも、「労働者に提供された学び舎」としてイメージを与え続けたのである。したがって、このイメージにもとづく限り、関大天六は「学問の自由」が保障された「大学の自由」が存在する大学であったわけで、同時に両者を否定させ得ない状況の中にあった。すなわち、天六における運動の成熟度は職場における組合体質のそれであり、武装政治闘争の以前にあった。

第一次ロシア革命の後のように反動の風が強くソヴィエト運動への気運は無くなったのかも知れない。

なすべき事は、核の結集であり居直り右翼の粉砕―ソヴィエト運動の復権である。

「文化団体連合会」が形成された日共―民青の指、工学部自治会は全共闘系自治会になり、自治会連合は、全共闘運動のしめくくりとしてほぼ確実に獲得されようとしている。しかし、学内はあまりにも〝正常化ムード〟が強く、核としての全共闘武装部隊は今は影もない。



教科書・参考書はお揃いですか？

あなた自身の学問の充実を！

書籍・文房具・事務用品

関大生協外販部天六